日本gene（ジーン） U-29

「gene（ジーン）」は英語で「遺伝子」の意。この企画では、実情をとらえにくい「U—29（アンダー29＝29歳以下）」世代にも脈々と受け継がれているであろう日本人の遺伝子をたどりつつ、20代男女の生態を紹介します。

エンジニア いつか世界で

秘めた情熱 やる気に火

ものづくり大国、日本。だが厳しい国際競争にさらされて、その地位は危うげだ。淡泊な印象が強いU—29（29歳以下）世代の技術者たちは新興国の熱気に伍（ご）していけるのだろうか。彼らの心情を探ってみると、意外にも、自分の発想力や構想力を頼りにグローバルな舞台での活躍を夢見る気概がうかがえる。もはや日本にこだわってはいない。外国人とぶつかり合い、ひ弱さを自覚しつつもいちずに能力を磨く。

「ああいう雰囲気の中でなら働けば楽しく開発できそう」。京都大学大学院工学研究科に籍を置き、就職活動中の車山明弘さん（24）は目を輝かせる。

「ああいう」とは、スイスの空調システム設計会社のことだ。今夏、参加した海外インターンシップで目にした光景に衝撃を受けたという。職場で上司と部下がファーストネームで呼び合い、日々活発に議論する。「教授に話しかけるだけでも緊張していた」自分や、個々人が自分の研究に集中する日本との差を感じた。

就職先には トヨタ自動車など日本企業に加えて、米ゼネラル・エレクトリック（GE）など海外企業も念頭に置く。「技術と英語を生かして、世界のフィールドで活躍したい」

住友電気工業で海外ケーブル会社の基幹業務システムの構築を担当する荻野卓巳さん（28）は新システムの導入を優先のため、9月にシンガポールを訪れた。英語には苦労したが、活躍の場が世界に広がっていることを実感した。「自分のやりたいことができれば働く場所にはこだわらないと、海外にも視線を向ける。

@ @ @

成熟した日本で育った技術者の多くは、ハングリー精神旺盛な新興国の若手に気おされがち。だが海外の技術者と接するうち、技術に国境がないことや、彼らに匹敵する情熱を自分のうちに秘めていることに、気づく。そうなれば、合理的な考え方をする20代は日本へのこだわりをあっさり捨てることさえできる。

「知識を吸収しようとする意欲がすごい」。ダイキン工業で中国向けの製品を担当する北島聖子さん（26）は打ち合わせの際に接する中国人技術者の熱気に圧倒された経験を持つ。

身近な製品の設計の仕事がしたくてダイキンに入社して4年。配属は希望通りで、順調だった。しかし年に3～4回の海外出張を重ねるうち、不安が膨らんできた。「自分はスマートな仕事をしようとし、ガツガツはしない。今は私の方が技術水準は上かもしれない。でも将来、中国人技術者と渡り合っていけるだろうか」。転職を考えるほどと思い詰めた時期もあった。

「今の職場で頑張れない人は転職しても つらい」と周囲に諭され、目の前の仕事を積いっぱいこなそうと考えられるようになった。仕事は好きだ。自分の設計が製品になると達成感がある。「武器」となる技術を身につけたい。武器さえあれば日本でなくても求められる人材になれる。

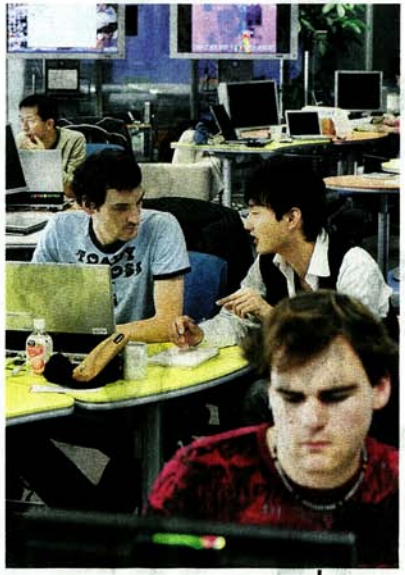
@ @ @

どこで仕事をするにしろ技術水準は上がる。「ものをつくるのが好き」というエンジニアの魂は20代も共有する。自分の好きなことへの執着心は強い。打たれ強いはずの世代でも、情熱をくすぐれば案外、鍛えがいがある。

「入社3年目までは何度会社をやめようと思ったことか」。オンキヨーでオーディオ機器のアンプの開発に携わる中西芳徳さん（29）は苦笑まじりに振り返る。技術者の世界には徒弟制度の名残がある。師匠は机をたたいて怒鳴ったり仕事を突き返したりする。徹底的にしごかれたが、技術を盗むために じっとみつめた。

音楽が好きで入社した。「電気回路の教科書に書いてあることに価値はない。簡単に学ぶことができない技術にこそ価値がある」。オーディオ機器市場では中国メーカーの追い上げが激しいが「今の時代にはどんな音楽の聴き方が求められ何が喜ばれるかを考えて形にしたい」と夢を追う。

大阪府吹田市の金型設計会社に勤める宏田勇助さん（21）の手元には5冊の大学ノートがある。ノートには図や書き込みがびっしり。複雑な形状の金型の設計方法など先輩に教えてもらったことを事細かにメモしている。仕事場で走り書きしたメモを休日や仕事後に清書する。現在入社2年目。「金型は大量生産に絶対に必要な技術でなくならない。社長には8年かかると言われたが、早く一人前になりたい」



将来のライバル？

30年後、社会で必要となる技術について、海外から来た研修生と話し合う汪連陸夫さん（29）。所内は席が決められておらず、「自分の研究分野と関係なくても自由に周囲の議論に参加できる」と話す（奈良県生駒市、NECのC&Cイノベーション研究所）＝写真 上間孝司

■ 先達からひとこと ■

東京工業大学教授・細野秀雄さん

日本の若手エンジニアの能力自体には悲観していない。確かに基礎的な学力はドがったかもしれないが、コンピューターを使える など優れた点もある。ただ、「志」が欠けていると感じる。論文などを見ていると流行に流されがち。その流行は産業化やお金になるかどうかで決まっている。孤独に耐えてオリジナルな分野を作り出そうという気概がないように思う。

不況の今こそチャンスの時だ。1970年代のオイルショックのころ、原油に依存している日本の産業は死んだといわれた。それでも苦労して技術を磨いて日本の産業は成長したという例もあるのだから。

「志」持って ／ 時にはケンカも必要

工業デザイナー・川崎和男さん

僕は東芝にいた時代、「巨匠」というあだ名をつけられて周囲に煙たがられた。エンジニアが出してきた図面を破るなど、デザイナーとしてケンカを繰り返したからだ。ものづくりではケンカするほどの緊張関係が大事なのだが、今の若い人はお互うケンカをしなくなったな。

国際舞台では韓国メーカーの勢いがすごい。デザインに造詣が深い経営者がいることで工業デザインの世界を目指す優秀な若者が多くなり、製品の競争力を高める一因になっている。日本の大学でも数式ばかり教えていないで、若者に絵筆を持たせて図面を描かせるような教育が必要ではないか。

Kazuo Kawasaki Ph.D.